

初年次教育としてのフレッシュマンキャンプが大学適応に及ぼす影響 —Social Provisionに着目して—

林 綾子¹⁾

The Effects of the Outdoor Orientation Program on College Adjustment Focusing on Social Provision

Ayako HAYASHI

Key words : Outdoor Orientation Program, Social Provision, College Adjustment

キーワード : フレッシュマンキャンプ, 初年次教育, Social Provision, 大学適応

1. はじめに

我が国の高等教育への進学率は、2009年に50%を超し、ユニバーサル化が進行している。その対応として、アメリカで1970年代に始まった初年次教育「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的に作られた教育プログラム」（濱名、2007）が普及している。

アメリカ等諸外国では、特に人格形成と人間関係構築を目的とした初年次教育として、野外・冒険教育的なプログラム（Outdoor / Wilderness Orientation Program）が幅広く行われている。内容としては、野外環境、特にWildernessと呼ばれる原生的な自然環境の中で、バックパッキングやロッククライミング、ソロ活動など幅広い野外活動を用い、グループでそして個人にとって身体的・精神的なチャレンジを体験することで、人間関係構築や自己や他者についての新たな認識を得るなどのポジティブな結果へと導くものである。それらの効果として、参加学生の自己評価の向上、成績の向上、退学率の低下、友人

関係の充実、卒業までの在学年数の短期化が報告されている（Bell, 2006）。

わが国においても、新入生オリエンテーションキャンプを初年次教育として取り入れている大学があるが、その効果の報告の多くは短期的で、また、感想や直後の効果測定に留まっている。そこで、本研究では大学適応に重要な要素としてSocial Provision（以下SP）に着目し、継続的な調査を実施することから、初年次教育としてのフレッシュマンキャンプ（以下FC）体験が大学適応（School Adjustment以下SA）に及ぼす影響を明らかにすることを試みた。

Social Provisionとは、Social Supportと類似した概念として用いられることが多いが、個人が周りの環境への適応やストレスや困難への対処のために活用する社会的環境の中の資源であり、個人が開発し使用するものと定義されている（Weiss, 1974）。

2. 研究方法

2.1. 調査対象者

本研究の対象となったのは本学の2010年度入学生320名であり、FC体験前後2年間にわたる4回の調査すべてにおいて不備なく回答

1) スポーツ学部

が得られた222名(有効回答率69%)が分析の対象となった。

2.2. プログラム概要

2010年度のFCは、入学式後の授業開始前に8クラス毎にA・Bコースに分かれて3泊4日のプログラムを実施した。各クラス(20名程度)が2班に分かれ、大学近くの湖岸のキャンプ場にてテントを利用した共同生活を行った。その内容は、アイスブレーキング(初めての人・環境での緊張をほぐすためのゲーム)、テント設営、野外炊事、自然の中で仲間と協力して課題に取り組むことで人間関係を構築する仲間作り野外ゲーム、自然の中のクラス対抗レクリエーション、班毎で困難に挑戦する登山、キャンプファイヤー、ふりかえりであった。

2.3. 研究デザイン

FCは全入学生必修の実習科目であり、完全な統制群を設けることができず、準実験デザインの1種であるウエイティングリスト・コントロールデザインを用いてFC前半組(FCA)と後半組(FCB)の2群に分けた調査を行った。つまり、FCA後、FCB前での違いがキャンプの影響と理解できる。

2.4. 調査内容

(1) SP尺度

Cutrona and Russell (1987) 作成のSocial Provision Scaleを著者の許可を得て、筆者ら(2010)の日本語訳尺度を用いた。なお大学適応との関連をみるため、学生が評価する自身のSPの人間関係を「大学内」に限定した。

(2) 学校生活適応・充実に関する尺度

大久保(2005)の作成した「学校への適応感尺度(SA)」(4因子30項目)を用いた。

(3) FCの評価に関する項目

FC直後の調査においては、キャンプへの満足度と学んだことの記述回答を求めた。

(4) 大学生活に関する自己評価項目

6か月後と2年後の調査では、学業成績の評価、友人関係についての不安、将来の夢や目標の明確さ、健康状態、FC役立ち度(各6件法)を追加項目として加え、さらにどのようにFCが大学生活に役立っているかという自由記述項目、加えて学校生活への満足度(0~100%で評定)についての回答を求めた。

2.5. 調査手続き

調査時期は、1回目としてFC開始3日前に行われたFCオリエンテーション時に両グループ共に、一斉に調査用紙を配布、説明の上回答を求め、2回目はFCA終了時の閉講式後にAグループに、同日午後より開始のFCB開始前の開講式前にBグループにSPの調査を行った。また、3回目として入学後6か月後、4回目として同調査を入学後2年経ち、3年次が始まる直前の履修指導時に行った。本研究の分析には統計ソフトIBM SPSS Statistics 19を用いて行った。

3. 結果と考察

3.1. SPの変容

SPの変容を明らかにするため、群と時期の2つを要因とする2x4の分散分析を行った(表1)。結果、有意な交互作用($F(3, 218) = 6.39, p < .001$)がみられ、単純主効果の検定を行った。群の単純主効果は、FCA後/FCB前でのみ有意であり、AグループがBグループ

表1. グループ別SP得点と分散分析結果

| | 1:FC前 | 2:FCA後・FCB前 | 3:6か月後 | 4:2年後 | F値 | | |
|--------------|--------------|---------------|---------------|---------------|-------|----------|---------|
| | M(SD) | M(SD) | M(SD) | M(SD) | 群 | 時期 | 交互作用 |
| Aグループ(n=113) | 98.68(17.73) | 107.12(19.40) | 107.54(17.03) | 106.13(16.15) | 4.85* | 32.76*** | 6.39*** |
| Bグループ(n=109) | 95.35(15.50) | 98.13(15.28) | 105.15(13.94) | 105.27(14.54) | | | |

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

よりも有意に高かった ($F(1, 220) = 4.85, p < .05$). 時期の単純主効果は有意であり ($F(3, 660) = 32.76, p < .001$), *Bonferroni*の調整による多重比較の結果 (図1), AグループではFCA前と比べ, FCA後, 6か月後, 2年後のSPが有意に高かった. FCの体験から有意にSPが向上し, その効果が6か月後, 2年後と維持されていることが示唆される.

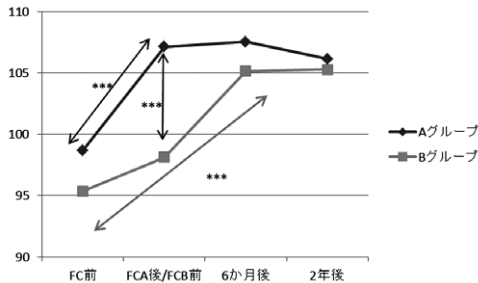


図1. SP得点のグループ別推移 (多重比較)

キャンプ生活の中での協力の要素, アイスブレイクやキャンプ生活, 仲間づくりゲームから登山という冒険活動への挑戦, ふりかえりや楽しさを分かち合うキャンプファイヤー築いていくプログラム構成の中での協力や共に困難を乗り越え, 楽しさや達成感を分かち合う体験によって人間関係が構築されたことがSP向上へとつながったと考えられる.

3.2. SPと大学適応 (SA) との関連性

① 6か月後と2年後の関連性の比較

6か月後において, SPの得点はSAと有意な正の相関がみられ, また, SAの各因子ともすべて有意な正の相関がみられた (表2). より学内においてSPが高い学生がより高い

大学適応感を持っていることが明らかとなった. 大学満足度とも有意な正の相関があり, 6か月後の時点では体験から得られたSPが大学適応と強い関係があることがわかる.

2年後においては, SP得点とSA合計点には有意な正の相関がみられたが, 相関係数は低くなり, 因子別の有意な関係も居心地のよさと劣等感の無さとの相関のみであった. SAと大学満足度には有意な正の相関が6か月後同様に強いことから, SP以外の要因がSAに関連していることが考えられる.

② 6か月後と2年後におけるSA因子別要因の検討

6か月後と2年後における関連性に違いがみられたことから, それぞれの時期におけるSAへ影響を与えている要因を探るため, SAの4因子を従属変数とし, SP, 成績, 友人関係の悩み, 目標の明確さ, 健康状態を独立変数とする重回帰分析を行った (表3). 多重共線性については, VIF (Variance Inflation Factor) を算出し診断を行った結果, すべて1.1~1.2の範囲内であり, 問題がないことがわかった. 分析結果より, FC後6か月の時点ではSPがSAのすべての因子に対して正の影響を与えているが, 2年後の時点ではすべて有意ではなくなっていた. 一方で, 6か月後では正の影響を与えていなかった学業成績や健康状態が2年後ではすべての因子に正の影響を与えていた. 友人関係の悩みについては, 両時点において重要であることがうかがえた. これらの結果から, 学年が進行するにつれて, SPだけではなくより多くの要素が大

表2. SPとSAの相関関係 (右上:半年後;左下:2年後)

| | n | SP | SA合計 | SA居心地 | SA被信頼 | SA課題 | SA劣等感無 | 満足度% |
|--------|-----|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| SP | 222 | -- | .742** | .703** | .579** | .614** | .495** | .294** |
| SA合計 | 222 | .150* | -- | .951** | .849** | .851** | .554** | .434** |
| SA居心地 | 222 | .140* | .935** | -- | .785** | .778** | .388** | .429** |
| SA被信頼 | 222 | .117 | .843** | .744** | -- | .646** | .297** | .354** |
| SA課題目的 | 222 | .069 | .835** | .717** | .652** | -- | .293** | .401** |
| SA劣等感無 | 222 | .155* | .572** | .402** | .334** | .297** | -- | .185** |
| 満足度% | 220 | .113 | .565** | .544** | .388** | .500** | .332** | -- |

** .相関係数は1%水準で有意 (両側). * .相関係数は5%水準で有意 (両側).

表3. SA因子別重回帰分析結果
(左：6か月後；右：2年後)

| | SA居心地 | | SA被信頼 | | SA課題在 | | SA劣等感無 | |
|----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | β | β | β | β | β | β | β | β |
| | 6か月後 | 2年後 | 6か月後 | 2年後 | 6か月後 | 2年後 | 6か月後 | 2年後 |
| SP | .62*** | -.01 | .49*** | .01 | .56*** | -.03 | .39*** | .03 |
| 学業成績 | .06 | .24*** | .07 | .14* | .03 | .15** | .03 | .25*** |
| 友人悩み | -.24*** | -.51*** | -.20*** | -.34*** | -.07 | -.24*** | -.33*** | -.34*** |
| 明確な目標 | .14** | .05 | .18** | .24*** | .33** | .37*** | -.02 | .03 |
| 健康状態 | -.05 | .25*** | .03 | .20** | .02 | .22*** | .04 | .25*** |
| R ² | .57*** | .45*** | .43*** | .31*** | .50*** | .35*** | .35*** | .30*** |

学適応には必要となること、特に学業成績や健康状態が重要となることが示唆された。

4. まとめ

結果より、FCがSPの向上とその後の維持、また大学生活全般において役立っていることが示唆された。このことから、FCは大学適応の2大要素の一つである対人関係構築において大きな貢献をしているといえる。FCは1年次の教養演習やその他多くの授業・活動を共にするクラス単位での活動を重視しており、その中でSPまたSA向上に効果があったということは、FCがBellら(2014)の述べていたよいプログラムの条件である「集団が現実的で価値があり、受け入れられていると感じられる体験」であり、「個々人の違いの中で健全な仲間関係を築くサポート」となり得たことがうかがえる。大学適応との関連をみる概念としてのSPの有効性もある程度証明されたといえる。今後、FCを通して獲得されたSPがどのようなもので、どのように活かされているかといった内容について質的なアプローチにより明らかにする意義があると思われる。

FCの有効性が明らかになった一方で、2年後の結果より、学年が進行するに連れて、学生のニーズが多様化し、初年次教育に留まらない学生サポートの必要性が示唆される。特に学習面へのサポート、また学習や活動に

精一杯取り組む上で必要となる健康状態に対しては、継続的なサポートが必要であると思われる。

本研究において、初年次教育としてのFCの効果と大学適応との関連について長期的な調査の意義が確認された。大学教育における野外スポーツの貢献・役割として、今後の普及や展開に役に立つことが期待される。

5. 引用文献

- Bell, B. (2006) Wilderness orientation: Exploring the relationship between college preorientation programs and social support, *Journal of Experiential Education*, 29(2), 145-167.
- Bell, B. J., Gass, M. A., Nafziger, C. S., and Starbuck, J. D. (2014) The state of knowledge of outdoor orientation programs: Current practices, research, and theory. *Journal of Experiential Education*, 37(1), 31-45.
- Cutrona, C. E., and Russell, D. W. (1987) The provisions of social relationships and adaptation to stress, *Advances in Personal Relationships*, 37-67.
- 濱名篤 (2007) 日本における初年次教育の位置づけと効果. *カレッジマネジメント*, リクルート, 145: 5-9.
- 林綾子, 宮本友弘 (2010) フレッシュマンキャンプと大学生活適応に関する研究. *びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要*, 8, 93-99.
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因-青年用適応間尺度の作成と学校別の検討-. *教育心理学研究*, 53, 307-319.
- Weiss, R. (1974) The provisions of social relationships, In: Rubin, Z. (Ed.) *Doing unto others*, Prentice Hall: Englewood Cliffs, 17-26.

付記

本報告は、学術雑誌へと投稿された論文の一部を中心に発表した内容を一部修正し、報告したものである。